

特集

医療のパフォーマンス評価

医療評価の枠組みは、ドナベディアン¹⁾の構造・過程・結果の観点からのアプローチが有効であるとされ、わが国の病院機能評価でも主として構造と過程に関する評価項目で審査が行われている。ところが、最近になって急速にアウトカムやパフォーマンスに関する数値・指標による評価についての関心が高まってきた。それは、医療を受ける立場から医療の質や適切さを示す端的でわかりやすい情報が求められているからであるといえる。そこで、あらためて医療の質を測定することの今日的意義と方法について総説的に取りまとめ、指標による評価で病院医療の質改善につなげることの必要性を確認しておきたい。

一方、急速に進捗しつつある医療制度改革においても、地域連携パスによって個々の傷病の総入院日数を把握し、在宅看取り率等の指標化によって施設医療から在宅医療への移行を強力に推進するなどの政策が採られようとしている。数値目標を設定してその実績評価によって改革を進めようとする背景には、社会保障財政がさらに深刻化することが見込まれているからであるが、医療人は施策の趣旨を十分に理解したうえで、今後の局面に是々非々で臨む必要がある。

さて、それぞれの病院においても、組織の管理から個々の診療行為まで、そのパフォーマンスを指標化してサービスの質向上や運営の効率化に役立てる必要性が指摘されている。施設間で数値・指標によって比較検討しようとするれば、その算定・計測の手順や条件は標準化されなければならない。最近、これらの臨床指標の標準化に向けた取り組みが進んでおり、その成果をみておく必要がある。さらに、現段階でどのような臨床指標が使用されているか、また指標化に伴う問題点や今後の課題についても最近の調査結果を踏まえて展望した。

指標化された医療の質に関するアウトカム情報は、医療機関自らが広告・広報として発信し、インターネット等を介して広く住民・患者に提供されることになる。特に医療を受けようとする立場からは、医療機関を選択するための情報として活用される意義が大きい。このような情報環境の整備は現下の医療改革において強く促進されているもので、病院医療に及ぼす影響も大きい。新たな局面を迎えて、高度・先進医療の情報提供、医療経済学的に見た情報の非対称性への影響、インターネットによる医療情報提供の現況と問題点、医療を受ける立場からの課題などについて論じる時期が来たと言えよう。

大道 久
日本大学医学部医療管理学部門教授